
心は美し

yama14

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心は美し

【Nコード】

N4604Y

【作者名】

yama14

【あらすじ】

歌手を目指している20歳、本田有。

さまざまな問題・困難を乗り越え、心にまっすぐに響いて、人々のエールになるような歌手になりたいという夢をひたむきに叶えようとする本田有の心が成長していく感動小説。

登場人物

登場人物（005章現在・小説内の時間で2011年11月）

本田有（20歳・男）001章登場

1991年8月24日生まれ出身県〇〇県血液型A型

本作の主人公。円城寺音楽大学声楽学科3年。歌手になりたいという夢を持つ。その夢を叶えるため通っている円城寺音楽大学声楽学科では成績一番で、何度もユニットを組まないかと誘われた。だが、自分が納得する相手が見つからずに悩んでいる。だが、同じ声楽学科の同志「広尾一志」と話したことによって、広尾と組みたい気持ちが強くなっている。高音が得意。

「ある」事件から友達をつくるのが苦手になった。子供っぽい顔をしているが、本人は全く気にしていない。

広尾一志（20歳・男）004章登場

1991年4月9日生まれ出身東京都府血液型A型

円城寺音楽大学声楽学科3年。低音を得意としている。有と組みたいと前から思っていたらしい。だが、天国にいる母親のために、自分が歌う唄ぜんぶ母親のために歌うと母親が亡くなる前に約束した。そのため、ユニットを組み相手に迷惑がからないようにと、ソロデビューを決意。だが、有の誘いによって、一志の思いも、徐々に揺らぎ始める。

緒方裕之（55歳・男）001章登場

1956年10月19日生まれ出身県福岡県血液型A型

有の恩師。現在は福岡の音大で先生として働いている。以前、円城寺音楽大学声楽学科の先生として働いており、有に対して人生の生き方を説いた。そのことから、有が慕っている人でもある。

本田雄之助（４８歳・男）００２章登場

１９６３年８月２４日生まれ出身県静岡岡県血液型Ｂ型

有の父親。温厚で優しい性格の持ち主。「心は美し」という題名の本を書き、ベストセラーになった。有は雄之助と性格が似ていると思っており、父の事を尊敬している。

西田守（１９歳・男）００２章登場

１９９２年１月１６日生まれ出身県〇〇県血液型Ａ型

有の元親友。小学校時代に有と同級生で、有と仲が良かった。あの事件以来、口をきいていない。

植松竜司（２０歳・男）００２章登場

１９９１年５月２４日生まれ出身県〇〇県血液型Ｏ型

有の５・６年生の時のクラスの番長。小学生時代は、気に食わないことがあったら、すぐ暴力的になり、今まで何人もの人を泣かしてきた。

大田倫太郎（２０歳・男）００２章登場

１９９１年８月１９日生まれ出身県〇〇県血液型ＡＢ型

小学生時代の植松の子分。

本庄敬（１９歳・男）００２章登場

１９９１年１２月１７日生まれ出身県〇〇県血液型Ｏ型

小学生時代の植松の子分。

第001章 「緒方先生」

2011年、冬

俺、本田有。20歳。円城寺音楽大学3年生。昔から歌手になるのが夢で、幾度も歌手を目指して頑張った。

昔から、心に響くような歌をうたっている人が好きで、自分も、心にまっすぐに響いて、それに、人々のエールになるような歌詞を書き、歌い、人を救いたいのだ。

俺は、歌いたい。

マジ、歌いたい。

歌いたくて、この円城寺音楽大学に来た。ここで、一緒に歌う仲間を見つけ、その仲間と一緒に頑張りたいと思っていた。

ひとりで歌うとは考えていない。なぜかというと、綺麗事だが、歌は何人もの人が協力して作り上げるものだと考えているからだ。が、ここに、今まで2年半この音楽大学にいたが、なかなか「この人だ!」というようない仲間に出会えることは出来なかった。そこから、この物語は始まる

俺は、〇〇県香椎市に住んでいる。人口10万人弱の小都市で、隣にある〇〇県の県庁所在地、人口30万人の福浜市にある円城寺音楽大学の声楽学科に通っている。声楽学科の中では成績は一番良く、みんなに、心に響く歌い方をする、そうよく言われる。そのため、歌手を目指す連中に、一緒に組まないかと何度も誘われた。卒業し

たら、一緒に食っていかないか

が、断る。なぜか、仲間を探しているのはこっちなのに、この人ではダメだと体が自然に思ってしまうのだ。自分が納得する人じゃなければ、ダメなのだ。

このままでいけば、卒業できるだろう。が、俺は1人で歌うつもりはないのだ。あと1年半以内にこれだ！と思える仲間に出会わないといけないのだ。

しかも、歌手となると俺が歌うにしても、自分以外のもう一人のボーカルや、目差す歌手像によっては、もっと人が必要な可能性がある。そのため、たくさんの自分を支えてくれる人が必要だ。それが得意なやつも見つけないといけないのだ。

しかも、俺はユニットを組みたいというのに、友達を作るのが苦手であった。友達を信じる、という当たり前のことが俺は「あの」事件から、一切出来なくなってしまうていたのだ。

どうしよう、そう思ったことは何度もある。

だが、思うようにうまくいかない。この円城寺音楽大学では、ダメなのか

「歌うという事、それは気持ちを訴えることだ。そして、その歌詞に込められた意味を、まっすぐに伝え抜くことが大切だ。その為には、自らの心の美しさ、また自らの個性というものを、これからも保って行けば、必ずいい唄い手になる。周りに流されるな」

「僕の好きな言葉、それは、『心は美し』だ」

この言葉は、俺が1年生の時、あまり成績が良くなかった時に、俺に特別指導をして下さった緒方裕之先生と言う、55歳の先生が、事情で、違う大学に行く時、最後の日に言った言葉だ。自分の心にまっすぐ響き渡るような美しいことばは、今でも心から離れない。

緒方先生には、色々と助けてもらった。音大のみんなには、説教がくどく、好きじゃないと言われていた。だが、俺は好きだった。先生は、世間体では綺麗事だといわれるような人生で大切なことを、色々と教えて下さった。

「人は、唯一、気持ちと言うのを表現できる生き物なんだ」

「心。人間は、生まれた時は誰でも澄んでいる物なんだ。だが、自分が、その心を汚していつてしまう。だから、きみにはその住んでいる心や瞳を、忘れないで生きていつて欲しい」

「生まれてきた時、絶対にその人には役割があるんだ。その役割を果たしていつて欲しい。そして、本田君が、いや、本田君にはそんな兆候はないけど、もし、本田君のまわりに自殺しようとしている人がいるならば、こう言つてやればいい。君には、この人生での役割を、まだ全うしていないんだよ、君は生きる価値があるんだ。生きる価値がないなんて思つてはいけない。だれにでも、探そうと思えば、人生での役割はあるんだ」

「神様から与えられたものなんだ、命は。その命を粗末にしてはならないんだ、絶対に。だから、自殺してはいけないよ、絶対に。わかったね、本田君」

「心は美しい。心というものは、いつまでも素直なんだ。心は正直なんだ。嘘をつこうとしても、心は抵抗する。そういう経験、あるだろ本田君。本田君には、その心の素直さを、自分が捻じ曲げない様にするんだよ」

「いいかい、心は美しい。だが、心を通わせられるような仲間がい

ると、もつともつと鮮やかに、心は光り、ピツカピカに美しい心になるんだ。君には、親友と呼べるものはいるか？」

そして、繰り返しになるが、最後に残したのがこの言葉だった

「まさに

人間の心は、美しいんだ。

きみも、そのことを忘れず、歌手になつて欲しい。

そのことを忘れなければ、君の目指している、人間の心にまっすぐに響いて、それに、人々のエールになるような歌詞を書き、歌って人を救いたいという夢を、かなえられると思うよ、私は。君が、美しい心のお手本を召せることができる。人間の力で、強く曲がつた心をきみはまっすぐにするような、不思議な力を持っているんだ。それを活かして、頑張ってもらいたいね。歌うという事、それは気持ち訴えることだ。そして、その歌詞に込められた意味を、まっすぐに伝え抜くことが大切だ。その為には、自らの心の美しさというものを、それをこれからも保って行けば、必ずいい唄い手になる。俺はそう信じているよ、君のことを」

いつも、心は美しい、心は美しいと言っていた。現実には、全人類が心が美しいとは限らないのだし、そうなら犯罪は起こらないし、なんだかそうではない人間の事を馬鹿にしているようにも聞こえた。しかも、本当に綺麗事に聞こえる。だがしかし、こういう言葉が、自分を励ましてくれるのも事実だった。

「心は美し」

「その言葉を、君に最後に託すよ。人間は、心が美しければ、最高

の人間になれるからね。」

「心は美し。僕が好きなその言葉を、忘れないでいてくれな、本田君！」

そして、15時24分発、のぞみ625号、博多行きは、俺の恩師である、緒方先生を乗せ、俺の目の前を走りさって行った。

あの時、俺は人生であの「事件」以来、初めて泣いたのだ。
男泣き。というものだった。

悲しいとか、辛いからとかじゃない。人生の道をやさしく補整して下さった、緒方先生がいなくなるという事が想像できず、涙をこぼしてしまった。

話は、俺の少年時代に戻る。

昔から、性格は良かった。みんなから好かれていたし、派手にまでつことを避け、小学校でちょうどいいポジション位の位置に立っていた。

だが、俺は、あの「事件」をきっかけに、俺の、「美しき澄んだ心」は、ぐちゃぐちゃになってしまった。

今、思いだしても辛い。

俺は、あの時、親友に裏切られたのだ。

第001章 「緒方先生」(後書き)

心が温かくなるような、感動小説を書こうと思っています。

初心者なので何かと迷惑をかけることがあると思いますが、よろしくお願いします。

第002章 「裏切り」

昔から、性格は自分で言うのもなんだが良かった。みんなから好かれていたし、派手に目立つことを避け、小学校でちょうどいいポジションの位置に立っていた。

だが、俺は、あの「事件」をきっかけに、俺の、「美しき澄んだ心」は、ぐちゃぐちゃになってしまった。

今、思いだしても辛い。

俺は、あの時、親友に裏切られたのだ。

あれは、小学5年生の春。

あの時、俺は見てしまったのだ。二人での最後の帰り道、こう言っていたのに。

「お前にだけ言っただけだから、絶対に言っなよ。俺は植松が嫌いなんだよ」

植松とは、クラスの番長。気に食わないことがあったら、すぐ暴力的になり、今まで何人もの人を泣かしてきた。俺も、植松とはあまりかわらない様になってきた。だから、皆におそれられ、嫌われていた。だけど、信頼できる、お前。「西山」。お前も、心からお植松を嫌っている、そう思っていた。信頼出来ていた、あの時に言ってくれたから、その疑いは確信に変わったのに。なんで、あ

んなことを言っただ？しかも、俺に。西山。

俺は、見てしまったのだ。俺一人で本屋に買い物に行くと、植松とその子分、大田と本庄にそそのかされ、当時は有名だった、あの本を、万引きしていた。

俺は、万引きをすること自体、許せなかった。しかも、俺の人生で唯一、親友と呼べる存在の西山が。

しかも、万引きしていたのは、俺の父さんの本だった。父さんは、昔、本田雄之助という、有名な小説家だった。小説というのは、思ったことをうまく表現できないと終わりだ。だが、父はその能力に長けていた。だから、俺もこんな事を自分で言うのもなんだが、そういつたことが理由で、表現能力に長けているのかもしれない。俺は、ただ、父さんと同じ、「書く」と言う事ではなく、「声を出す」と言う方を選んだだけだった。そんな父さんを見て育った俺は、昔から、憧れていた。父さんを心から尊敬していた。だから、許せなかった。俺の父さんの本を、万引きするなんて。知っているだろう、西山。知っているだろう、西山。俺の父さんは小説家で、「心は美し」という題名の本を書き、ベストセラーになった本田雄之助なんだぞ。

そして、俺はその子供、「本田有」なんだぞ。

西山は、そのことを知りながら、やっているのだろうか？

そう思うと、許せなかった。

植松に言われてやっていることだとしても、許せなかった。

断ればいいのだ。植松にしかれるのが怖いからか？友情より、そっちを選んだのか？もう、このことを見た時点で、お前とは親友じ

やなくなつた。

そしてついに、西山が、「心は美し」という本を、バックに入れた瞬間、俺は西山に飛びついた。

「この野郎！！！」

俺は、西山に体当たりし、本はふっ飛んだ。が、すかさずに植松たちが俺を殴ってきた。

「俺のダチによお、よくもやってくれたな！」

そして、俺はでかい植松に見事にバックドロップをかけられ投げられた。

だが、父さんの為だ、そう思うととてつもない勇気があふれ出し、俺は植松ではなく西山の顔面を殴った。血を吐いた。西山の血は、俺の父さんの本の、「心」という部分に、ふりかかった。

心という字が、一瞬哀れに見えた。初めて、心と言う字を軽蔑した。その字を見ている間に、植松たちが3人で抑え込んだ。さすがに3人の人間の力には勝てず、そこにへたり込んでしまった。

本は、数十冊投げ出され、俺の父さんが書いた「心は美し」と言う題名の本の心と言う字に、西山のけがれた手がかかっていた。

そして、西山は、

こう言った。

「お前、嫌いなんだよね。いい子ぶっちゃってさあ、みんなには、影濃くない癖に人気者でさあ、そしてクラスで一番モテてさあ、お前、うらやましいんだよ。しかも、お前の父さんは小説家で、しかも、今年一番売れた。だから、どうせ金あるんだろ？ いつも俺に「貧乏だよ、俺も」とか言っときながら、正直金もらってんだろ？ 俺が欲しかったゲームソフト、お前、持っていないとか言ってたくせに、俺が前買い物に行った時、ゲームを10本くらい大人買いしてたのを見たんだよ。そして、その中に入ってたのを見たんだよ。あのゲームソフト。」

「俺、嘘つくの嫌だからって、その事、正直に言っただけじゃねえか！」俺は、苦し苦しに言う。

「だけど、10本も買ったなんて言っただか？俺、あのときわかったんだ、お前に同情されてたんだって……俺、同情されるの嫌いだっってお前に言っただろ？それなのに……それだったら、はつきり言ってもらえば良かった！」

俺は、同情とかじゃない、そう思った。お前の事を思ってやったんだ、同情なんかじゃないんだよ！俺だって、お前の分買おうとしたよ！そのうちの5本は、お前の分だよ！けど、あの心が冷たい俺が大嫌いな母親にそんな大金をなんで友達に使わなきゃいけないんだ、友情と金、どっちが大切なの？とひっぱたかれた……。そして、5本全部あんたが貰いなさいって言われた……。証拠を見せてやるうか？1本だけダブってんだ、あのゲームソフトと一緒にやる為に……。

もちろん、友情は金に換えられないという事を知りながらも………。

お前の為に買おうと思ったんだよ！
だが、そう言おうと思ってても声がまったく出ない。

「お前、正直に言ってくれば良かったんだよ。10本買ったって。それを聞いたただけだったら、ただ、本田は案外冷たいんだな。案外いい子ぶる奴なんだな。ぐらいで済んだのに！ただ、俺に同情したのが許せなかった……。」「

なんで、誤解するんだ！違う！違う！俺は、お前の為にやったつもりだった！

「おい！裏切り者！」

その言葉は、裏切られることを経験したことがない幼少期の本田少年にとっては心にぐさりと刺さる様な、とてつもなくダメージの高い言葉だった。

「お前の事、ゼッってえ許さねえ！絶対に！二度と、二度と、俺の前

に現れんな！」

そう言った後、一度西山はうつむき、そのまま走って本屋の外に出て行った。俺は、ただその状況を茫然と見つめていた。そして、植松の手を俺が残っていた最後の力を出し切って振りきり、本屋を逃げるように出たのは、店員が駆け付けた時だった。

俺は、その時始めて泣いた。これは、悲しい時に出る涙と、後悔して時に出る涙が混ざったものだった。

10本も買った俺を責めた。最初からプレゼントするつもりだったなら、母親と口論になったとしても気持ちをもっすぐに貫くべきだった。その時に、俺は心と信念を貫く事の大切さを学んだ。

が、俺はショックが抜けきらなかったのか、学校で物に当たるようになり、しまいには友達に暴力をふるうようになり、人格が逆転した。1か月ほどでもう植松の手に負えないほどグレてしまっていた。そう、心がグニヤリと曲がってしまったのだ。

第003章 「誓い」

「あの」事件からぐれてしまった俺は、ギリギリ、中学と高校は卒業できた。だが、何人もの先生に言われた。あなた、大学で苦勞しますよ、と。

そして、その心に、少しでも救いを上げようと、母親と俺が18の時に離婚した俺の大好きなやさしい父親が、多額の金をはたいて、入試をパスして小学生の頃行っていた歌手と言っ夢をかなえさせる為に 音楽大学に入ることとなった。

そして

偶然、大学のキャンパスの中で俺とぶつかり、その時から俺と接点を持ち関わるようになってくれたのが、

俺の恩師、緒方先生だった。

そして、俺は、緒方先生の美しい心に惹かれ、俺もそういう人間になりたいと思い、緒方先生の言う事を忠実に守った。大好きな父親の期待を裏切らない為に。

すると、俺は少年時代の輝きを取り戻すかのように、心をまっすぐ伸ばしていった。緒方先生には、教え子をそういう風に出きる様な不思議な力があつたからだ。

そして、今の俺の姿は、緒方先生の努力がなければなかった。俺の心をまっすぐに正すために、どれぐらいの氣苦勞を要したんだろう？本当に、感謝の氣持ちでいっぱいだった。緒方先生には。

そして俺は、緒方先生の為に、人間の心にまっすぐに響いて、それに、人々のエールになるような歌詞を書き、歌って、人を救いたいという夢を、絶対になえよう、そう心に誓った。

第004章 「もう一人のボーカル」

ああ、眠い…………。

うちの近くの最寄り駅の佐倉崎で中京線快速に乗り、音大前で降りる。

毎度毎度の混み方である。

悲惨である。朝のラッシュ時乗車率200パーセント。その中京線に乗るという動作で、1日の体力を50パーセント消費した感じがする。中京線は、ほんとにこむから困る。寝たいのに、1カ月に1度運良く席をゲットしたとしても、周りがうるさくて寝れない。昔から、周りが静かじゃないと寝れない体質なのだ。

だから、俺はPSPをやるか、DSをやるか、緒方先生の為に、皆の心にまつすぐに響いて、それに、人々のエールになるような歌詞を書き、歌って、人を救いたいという夢をかなえる為の第一歩として、人々のエールになるような歌詞を書いたりもした。

俺は、顔的にそうなのか、他の人より幾分若く見えるみたいで、16歳とか、17歳とかに間違われることは多々あった。

ひどい時には、初対面で、14歳とか15歳とか言い出す俺の音大のサークルの仲間もいる。

しまいには、「高校生がココに入っちゃいけないよ」と、初対面の新人の警備員に言われる始末で、良く言えば素直な顔してる、で、悪く言えば、20歳のくせに子供っぽく見える、という事だ。

俺はそれを得意げに話したりもしないしコンプレックスに感じた事はない。こんな事、どうでもいいって感じた。もちろん、大人っぽい顔つきにはなってみたいが、生まれつきなので、しょうがない、と思う事になっている。こんなこと後悔してもしようがないし。

俺は、基本的にどっちかと言えば前向き。後ろ向きになっても何も意味がないし、物事が前に進まないからだ。

やっぱり、俺は新しい曲の歌詞も思い浮かばなかった。最近、発想

がまったく面白くない。皆の心にまっすぐに響いて、それに、人々のエールになるような歌詞というのが、全く頭のなかにひらめかない。

なにか、思いつくきっかけをもつには、何か現実のきっかけが必要な気もした。

円城寺音大の授業は、1年生の前期をのぞいて（前期は基本的な音楽指導をするからだ。皆わかっていても、基本が大切だという事で、みっちり音楽と言う科目の基本を叩き込まれる。）、選択制だ。科目には、音楽学科、声楽学科（俺が入っているのがココだ）、作曲学科（作曲専攻・音楽学専攻）器楽学科（ピアノ専攻・オルガン専攻・管楽器専攻・弦楽器専攻・打楽器専攻・邦楽専攻）、音楽専攻部（作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻）そして短期大学部音楽部専攻科（作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻）の2学部と6学科に分かれている。

俺はそこで声楽学科。ここには、オペラ歌手を目指す奴が多くて、俺みたいに普通の歌手を目指すという奴は少ない。その中で、あの「事件」で友達をつくるのが苦手になった俺は、とりあえずもう一人ボーカルを見つけたことにした。どういう歌手像にするかは、そのもう一人と話し合って決める。だがしかし、そう決めたとしても結局は、もう一人のボーカルを担当してくれる奴を見つけないといけないのだ。

俺は、声楽学科のキャンパスに入った。今までだったら、第四音楽室に行つて、緒方先生に朝の挨拶をしていたのだが、緒方先生は福岡に行つて大路大学音楽学科に行ってしまったので、毎日のその朝の日課がなくなってしまった。

緒方先生が福岡に行つてから、友達（いくら友達を作るのが苦手だ

からと言って、一人も友達がいなかったわけではない。しかも、この大学の3年生は450人くらいいるのだ。その中で探せば、親友（親友と呼べるのはあいつ。西山しかないのだから）とまでは行かないが、十数人は見つかる。

その中で、ボーカルが出来そうなのは、広尾一志しかなかった。声楽学科に入っていて、俺は高音を得意とするのだが、広尾は低音を得意としている。二つの声が重なりあつたとき、非常に美しくなりそうだ（二人で歌ったことはないのだが）。

俺は、授業が終わった後、友達といっても少し話したことがあるくらいで（友達と言えるのか？）、性格がわからず、自分が納得する相手なのかはわからないが、広尾に久しぶりに話しかけてみることにした。

第005章（1）

「広尾一志」（有の視点）（前書き）

同じ章を、有の視点と一志の視点で書いています。まずは、有の視点からです。

第005章（1） 「広尾一志」（有の視点）

すっかり葉を散らしたポプラ並木の下を歩き、いつも広尾がいる図書館へ向かった。

居るかどうかはわからないが、たぶん、そこにいるだろう。

それにしても、11月にしては寒い。福浜、香椎の初雪も、今年は早そうだ。

図書館の入口が見えてきた。一ヶ月もしやべっていない。本当に友達とはいえない間柄だ。そんな奴に、急にユニットを組みたいといわれても、最初は引くだろう。そもそも、自分が納得する相手かどうかわからないのだ。

緊張してきた。手が汗ばむ。

図書館に入ると、なかなか人がいた。俺は、図書館の階段を手すりを使って登り、2階にたどりついた。あいつは、いつもどっかのテーブルに座っている筈だ。

数分探していると、広尾の姿が見えた。

とりあえず話しかけた。

「おい、広尾！」

読書に集中しているのか、なかなか気づかない。読書している広尾の姿は、いつもと違ってメガネをかけていて、なかなかカッコいい。図書館では大きい声も出せないなので、肩をたたいた。

「おい！」

広尾はこっちを向いて、怪訝そうな顔をした。

「なんですか、こっちは読書に集中しているんだ・・・って、本田

か」

さっそく本題を切りだすことにした。

「久しぶりだな。さっそくだけどちよつと話したいことあるから、音楽堂のホールで話さないか？」

広尾はめんどくさそうな顔をした。

「この小説読み終わってからな。で、どういふことを話したいんだよ？」

低いけど美しい声で聞き返してきた。

「それはあとで。早めに読んでくれよ」

「了解。出来るだけ早く読むことにするよ」

久しぶりに話したが、広尾はこんなサバサバした性格だっけな？と思った。

広尾が座っているテーブルの近くの本棚をあさっていると、後ろから声をかけられた。

「で、話ってなんだ？」

「とりあえず、図書館出ようぜ」

広尾を引き連れ、外に出た。

「で、何だよ？」

俺の顔を凝視してきた。

「ここで立ち話でもいいか。あのさ、率直に言うけど、広尾とユニット組みたいんだよね。広尾は低音だし、俺は高音だから。組み合わせさったら美しくなりそうだし」

「いやだよ。俺はソロで行きたいんだ」

広尾は即答した。

「なんでだよ？」

「あんま恥ずかしいからいいかねーけど、本田ならほかの人とは違ってバカ騒ぎするタイプじゃないから、信頼できるから言うぜ。母親と約束したんだよ。天国にいる母親とな。母親が死ぬ前、俺は

言っただ、俺は母さんのための唄をつくり続けるってな。母さんのための唄をつくり続けるんだったら、ユニットを組んだらその相手の音楽の幅が狭まりそうでかわいそうなんだよ。だってよ、俺が歌いたいと思った歌を歌い続けるんだぜ？嫌だろ。俺は結構誘われたけど、その条件言ったら、みんな拒否したよ」

優しい奴だな、そう思った。

「なあ、けど半々じゃダメか？半々じゃ。お前の母さんの唄と、俺らの唄。半々ってのは？」

「嫌だね。母親と約束したから。確かに、俺も本田と組めたらどれだけいいかって考えたことあるよ。声も美しく合わさるし、俺も前に何度か考えたことあった。この音大の中では、俺にとって一番組みたいのは、お前なのかな、って」

この一言で、体に電流が走った。迷いが確信に変わった瞬間だった。こいつだ、俺が組みたいのは、こいつだ。

「俺も、今気付かされたのかも知らない。俺が組みたいのは、お前かもしんないなって。今さ、体に電流が走ったんだよ。ビリビリってな。お前と組みたいという思いが、心からあふれ出たんだ」

思ったことを言葉にして、そのまま率直に吐き出した。広尾は、いつもと変わらない目で、俺を見ていた。

「本田にそう言われるとありがたいな。けど、組めないんだよね、俺の母親の曲1本じゃなきゃ。わがままに聞こえるかも、しれないけれど。すまないな、本田。案外俺って、頑固なんだ」

俺は考えた。広尾が納得してくれる方法を。

すると、ある案が思い浮かんだ。失敗すれば、自分の歌手としての夢はもう叶えられなくなるかもしれないが。

「あのさ、卒業して、俺とユニット組んで、2年だけ俺の方向性でやってくれないか？もし、2年で売れなければ、お前が作りたい歌に従う。お前だって、俺と組んだらもつと歌が良くなると思って言

つてるんだろ？卒業するまでの1年4カ月は、作曲やインディーズ・レーベルへの売り込みに費やす。最初の2年で売れるまでを目指すんだから、本当に難しい。だから、広尾には有利な条件なんだ。けど、その最初の2年でうれば、俺の方向性はあつてたつてことだ。そのあとは、二人で作りたい曲をつくつていこう。もちろん、広尾が作りたい母親への唄も売れている中で発表できる。だめ、かな？」

広尾と組めることを考えると、すらすらと考えが浮かんできた。

「分からない」

広尾は、難しそうな顔をした。

「1晩だけ、考えさせてくれないか？頼む」

そうだよな。もし、俺らが2年以内で売れたら、お前の夢は半分しか叶わなくなるんだからな。けど、その分売れている中でお前が歌いたい曲を発表できる。歌手ならだれでも、売れたいって思うのは共通だと思う。

「分かった」

俺は、2つ返事でOKした。

広尾がポプラ並木を通って帰っていく姿を見送ると、俺は帰ろうと思つて、荷物をまとめ、学校を出た。

広尾は、俺と似ている。売れようとして、流行の曲ばかり歌つて、自分の個性を見失つて、そのまま破滅するような奴じゃない。自分が歌いたいという歌を歌おうとしてる。歌手という職業を、心から愛して、楽しもうとしている。

「いいかい、心は美しい。だが、心を通わせられるような仲間がいたら、もっともつと鮮やかに、心は光り、ピツカピカに美しい心になるんだ。君には、親友と呼べるものはいるか？いないのなら、作つた方がよいよ、本田君。」

緒方先生に言われた言葉を思い出した。本当に、こいつと組めば、心がピッカピカになる気がした。

第005章(2) 「広尾一志」(一志の視点)

授業終了後図書館にすぐ行った僕は、最近よく座る2階の奥の窓際のテーブルで昨日読み始めた小説を読んでいた。

物語も終盤に差し掛かったところ、後ろから肩をたたかれた。

なんだよ、いいところなのに・・・と思って、めんどくさかったが僕は後ろを向いた。

「なんですか、こっちは読書に集中しているんだ・・・」

といったとき、肩をたたいた主が本田であることに気がついた。

本田の性格は個人的に好きだ。顔は子供っぽいが、精神年齢は成長していて大人だ。こいつは、高音が得意なので、僕は何度もユニットを組みたいと思ったことがある。もちろん、母親との約束があるから無理なのだが。

高音の澄んだ声で、僕に話しかけてきた。

「久しぶりだな。さっそくだけどちよつと話したいことあるから、音楽堂のホールで話さないか？」

なんだ？僕に話したいことって。本田とは関わりはあまりないはずなのだが・・・

悩んでいた顔を、めんどくさそうにしているなという顔に間違つてとらえたらしく、本田は怪訝そうな顔をしてこちらを向いてきた。

「この小説読み終わってからな。で、どういうことを話したいんだよ？」

「それはあとで。早めに読んでくれよ」

俺が本を読んでいるところを話しかけるなんて、よほど重要な話なのか…？

だがしかし、この小説のクライマックスも気になって気になって仕方がないので、終盤をさっさと読んで本田と話すことにした。

「了解。出来るだけ早く読むことにするよ」

本田が久しぶりに話しかけてきた。それだけでもびっくりなのに、俺に話したいことがあるって…
「いったい何なんだ？」

本を読み終わった。クライマックスに、大どんでん返しを期待していたのだが、正直言っておもしろくなかった。本をあさっている本田に今度は俺が肩をたたいた。

「で、話ってなんだ？」

「とりあえず、図書館出ようぜ」

俺は、本田に手をひかれたまま、図書館を出た。

「で、何だよ？」

重要な話ってなんだろうって思った。

「ここで立ち話でもいいか。あのさ、率直に言うけど、広尾とユニット組みたいんだよね。広尾は低音だし、俺は高音だから。組み合わせさったら美しくなりそうだし」

「いやだよ。俺はソロで行きたいんだ」

は？何言ってるんだこいつ。母親との夢をかなえるためにも、その誘いは断る。

「なんでだよ？」

「あんま恥ずかしいからいいかーけど、本田ならほかの人とは違ってバカ騒ぎするタイプじゃないから、信頼できるから言うぜ。母親と約束したんだよ。天国にいる母親とな。母親が死ぬ前、俺は言ったんだ、俺は母さんのための唄をつくり続けるってな。母さんのための唄をつくり続けるんだったら、ユニットを組んだらその相手の音楽の幅が狭まりそうでかわいそうなんだよ。だってよ、俺が歌いたいと思った歌を歌い続けるんだぜ？嫌だろ。俺は結構誘われたけど、その条件言ったら、みんな拒否したよ」

それをしてしまったら、本田の音楽の幅が狭まることになる。それが、嫌だった。

「なあ、けど半々じゃダメか？半々じゃ。お前の母さんの唄と、俺らの唄。半々つてのは？」

一瞬迷った。けど、母親の夢をかなえたいという思いが強かった。

「嫌だね。母親と約束したから。確かに、俺も本田と組めたらどれだけいいかって考えたことあるよ。声も美しく合わさるし、俺も前に何度か考えたことあった。この音大の中では、俺にとつて一番組みたいのは、お前なのかな、って」

「俺も、今気付かされたのかも知らない。俺が組みたいのは、お前かもしれないって。今さ、体に電流が走ったんだよ。ビリビリってな。お前と組みたいという思いが、心からあふれ出たんだ」

すると、俺の心にも、電流が走った。こいつと同じだ。俺の心は、似ている。けど、断らなきゃいけない。母親との夢は、叶えたい。けど、俺の心が揺れ動いているのも事実だった。

「本田にそう言われるとありがたいな。けど、組めないんだよね、俺の母親の曲1本じゃなきゃ。わがままに聞こえるかも、しれないけれど。すまないな、本田。案外俺って、頑固なんだ」

すると、本田はとんでもないことを言い出した。

「あのさ、卒業して、俺とユニット組んで、2年だけ俺の方向性でやってくれないか？もし、2年で売れなければ、お前が作りたい歌に従う。お前だって、俺と組んだらもつと歌が良くなると思って言ってるんだろ？卒業するまでの1年4カ月は、作曲やインディーズ・レーベルへの売り込みに費やす。最初の2年で売れるまでを目指すんだから、本当に難しい。だから、広尾には有利な条件なんだ。けど、その最初の2年でうれば、俺の方向性はあつてたつてことだ。そのあとは、二人で作りたい曲をつくっていいこう。もちろん、広尾が作りたい母親への唄も売れている中で発表できる。だめ、かな？」

ちょっと待て。その条件は、本田にとってとても不利だ。本田だつて、夢があるんだろ？その夢を、叶えられないかもしれないんだぜ？けど、そこまでいって、俺と組みたいという本田の思いが、心から嬉しかった。

「分からない」

この条件をのんだら、母親との約束は半分しかかなえられなくなる。正直言つて、おれはあまり売れなくてもいいのだ。歌手として、もちろん売れた中で母親への思いを歌った歌を発表したかったけど、母親との約束が果たせれば、売れなくてもいい、そういう思いが強かった。

「1晩だけ、考えさせてくれないか？頼む」

「分かった」

すぐ答えを求めてくる奴と違って、本田は考えさせてくれる奴だ。いい奴なのだ。

俺は、ポプラ並木の道を通り、学校を出た。ここまで本田が言ってくれるなんて……

うれしかった。けど、夢を半分しかかなえられなくなるという事実が、俺の気持ちを迷わせた。俺の瞳から、涙があふれ出た。

けど、もう心の隅でこう決めていたのかもしれない。

「本田と組もう」

って。

俺には、父親と兄がいたのだが、俺が10歳の時、母親と離婚したため、父親と兄は家から離れた。

理由は、父親が俺のことを好きになれない、そういう理由だった。その離婚の理由を聞いたときから、俺の心はふさぎこんだ。その理由を父親から聞いた時、俺はショックを受けた。「おまえには、なにもいいところがない、だから嫌いだ」って。

その時から、俺は不登校になり、母親に当たるようになった。けど、母親は平日も休日も自分の体を酷使しながら働いて、俺を辛抱強く見守ってくれていた。見捨てるなんてことはせずに。本当は、ありがとって伝えたかったのかもしれない。けど、その思いとは裏腹に、母親に当たってしまうのだ。

そして、13歳の春、俺は人生のどん底にあった。そして初めて、自殺未遂をした。

飛び降りたのだ。2階の窓から。頭から。死ぬのが怖いという思いもあったから、2階から飛び降りたのかもしれない。そして、俺は骨折をした。本当に、人生の最悪の時期だった。

だが、人生の転機が、俺にもやってきたのだ。それが、16歳の夏。

母親は、俺に通帳を見せてきたのだ。

「一志、覚えてる？8歳の時、お父さんに夢を言ったよね。『歌手になりたい』って。このお金を使って、音楽大学に行きなさい。お母さんは、まだその夢を捨ててきてないって、知ってたのよ。だって、私は、一志の母親なんだから」

その一言を聞いた瞬間、俺の瞳から涙があふれ出した。

なんで、今まで母親の気持ちを考えられてあげられなかったんだろう。どうして、お母さんの息子なのに、その気持ちを分からずに、母親に当たり続けてしまったんだろう。

その時、心の中で、お母さんのために絶対歌手として成功して親孝行をするという思いがふつふつとわきあがってきたのだ。

俺は、のこりの1年半、母親のため、そして自分の夢をかなえるため、必死に勉強した。

そして、合格発表の時、俺の受験番号があったとき、俺は幸せの最高潮にあった。

だけど、神様は、まだ僕に試練を与えてきたのだ。

母親が、倒れたのだ。

膵臓がん。余命3カ月。

そして、大学の1年生の7月、母親は亡くなった。

俺は、大学の最初の3カ月を休んで、看病に当たった。がんでも、治ると信じていた。けど、もう、その思いは叶わなかったのだ。

けど、俺は最後にこう言った。

「母さんのための唄をつくって、歌い続ける」と。

そういったときの母さんの表情を、今でも鮮明に覚えている。ほほ笑んで、うなずいてくれたのだ。しかし、それで最後となってしまった。

俺は、つらかった。けど、母さんのためにも、という思いが強かった。だからこそ、今まで頑張ってきた。

天国で母さんが見守ってくれているから、夢を追いかけて頑張れたのは、言うまでもない事実だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604y/>

心は美し

2011年11月17日18時44分発行